

第7章

FXに欠かせない 「チャート分析」を 極めよう

- 001 為替レートの履歴書、それが「チャート」 82
- 002 たった1本のローソク足でも多くの情報が含まれている ... 83
- 003 チャート分析の基本はトレンドを見極めること 84
- 004 トレンドラインを引いて相場のトレンドを把握する 85
- 005 トレンド&チャンネルラインを使ってタイミングを計る 87
- 006 チャンネルラインを使ってトレンドの変化を先取りする 88
- 007 トレンドラインを下抜けると元に戻るの簡単ではない ... 89
- 008 トレンドラインを修正してトレンドの変化を確認する 90
- 009 チャートの山や谷に引くサポート&レジスタンスライン 92
- 010 サポート&レジスタンスラインを引く3つのルール 94
- 011 数値でしっかり管理できるテクニカル指標 96
- 012 移動平均線はトレンドを測る便利なツール 97
- 013 サポート&レジスタンスラインとして移動平均線を使う ... 98
- 014 周期の異なる移動平均線の特徴を理解しよう 99
- 015 1本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る ... 100
- 016 2本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る ... 101
- 017 中長期移動平均線の向きに着目して精度を上げる 102
- 018 見やすさが個人投資家に人気のMACD 104
- 019 買われすぎと売られすぎが一目瞭然のストキャスティクス ... 105
- 020 使いこなしが難しいRSIはダイバージェンスに注目する ... 106
- 021 チャート分析を使ってトレードの成果を高めるには 107

- コラム** ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
- 経済のグローバル化と外国為替相場の密接な関係 ----- 108
- 通貨安はメリットばかりではない ----- 109

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

001 為替レートの履歴書、 それが「チャート」

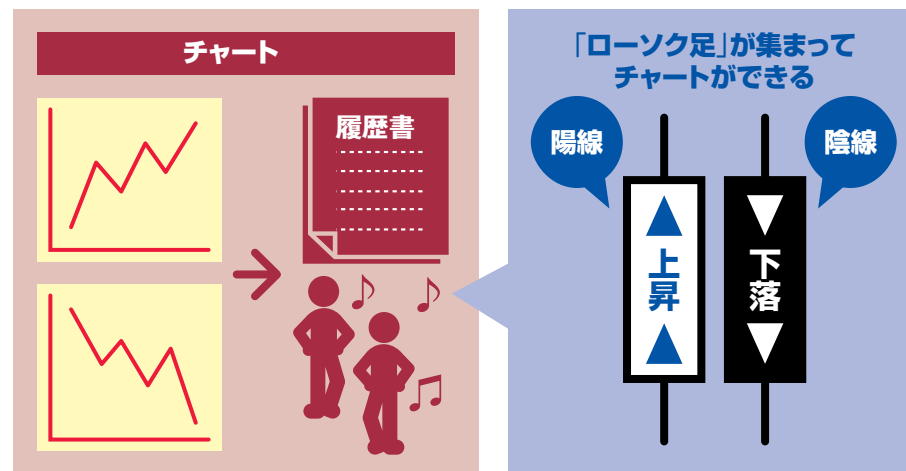
各国の経済環境や金利、経済指標の事前予想などを入念にチェックしても、最終的に為替レートがどのような水準にあるのか、現状は上がっているのか、下がっているのかを把握していなければ、トレードをすることはできません。そのためにはチャートを読みこなす必要があります。

外国為替市場の仕組みや経済指標の見方を理解して、注文の出し方を身に付けたら、いよいよ実戦に突入です。しかし、現在の為替レートだけを知っていても、できるだけ有利な値段で取引したいものです。しかも、外国為替に限らず、相場というものは「流れを知る」ことが大事。そこで欠かすことができないのが「チャート」です。

▶▶相場の流れが一目で分かる「チャート」

チャートという聞き慣れないかもしれませんが。たとえば、ドル／円相場が過去1年間でどのような動きをしてきたのかを知るためのグラフと考えれば分かりやすいでしょう。FXのチャートはいわば、為替レートの履歴書。それを見ることで、相場の流れが一目で分かります。

グラフといってもいろいろあります。折れ線グラフやローソク足が集まったグラフだったりします。これらのグラフのことをチャートといいます。チャートを見るときには、一般的に4つの為替レートで形作るローソク



チャートを見ると、こんなことが分かる

- 過去にどんな動きをしたのか
- 最近では上がっているのか、下がっているのか
- 長い目で見て、上がっているのか、下がっているのか
- 通貨ペア特有の動きがあるかどうか……など

足を使います。厳密には、これを「ローソク足チャート」といい、2通りのローソク足があります。上昇を示す白いローソク足＝陽線と、下落を示す黒いローソク足＝陰線で、あわせて「陰陽線」といわれています。インターネットが普及して、カラー表示では、陽線が「赤」、陰線が「緑や青」で表示されるのが一般的です。ローソク足の具体的な仕組みについては、次項で解説しますね。

ところで、ローソク足は日本で生まれました。欧米では、折れ線グラフやバーチャートが主流でしたが、ローソク足はシンプルながら非常に優れていると認められ、「キャンドルスティック」として世界で広く使われるようになりました。ローソク足以外にも様々なチャートがありますが、本書ではチャートといえばローソク足チャートと考えてください。そして、チャートを漠然と見るのではなく、一定のルールに基づいて読み解くことで、相場の流れをより深く理解することができます。これを「チャート分析」「テクニカル分析」といいます。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

002

たった1本のローソク足でも多くの情報が含まれている

江戸時代に開発されたローソク足は、今やグローバルスタンダード。いろいろな形のローソク足が連なっているのがローソク足チャートです。これを読み解くことで相場の流れが分かり、トレードのタイミングを計れるようになります。ところで、ローソク足って？ それをここで解説します。

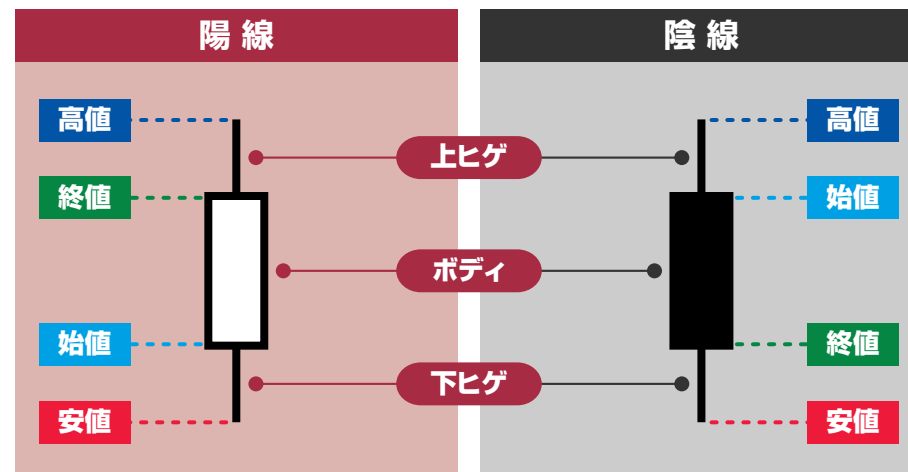
ユニークな形をしているローソク足には、ちゃんとした意味があります。まずは1本のローソク足の各部位には、「はじめね始値」「たかね高値」「やすね安値」「おわりね終値」という名前が付いています。「始値より終値が高い」のが陽線、「始値より終値が安い」のが陰線です。また、始値と終値の間の長方形を「ボディ」、ボディの上下に伸びている線を「ヒゲ」といいます。ヒゲは上に伸びていれば「上ヒゲ」、下に伸びていれば「下ヒゲ」です。

▶▶ローソク足の形で相場の強弱を計る

上昇を意味する陽線のボディが長ければ、それだけ買いたい投資家が多く、下落を意味する陰線のボディが長ければ、それだけ売りたい投資家が多いことを意味します。

また、下ヒゲが非常に長く伸びたときは、大きく下落してお買い得感が出たために、「この価格水準なら買っても良いかな」「良い加減に決済して利益を確定しないと」と考える投資家が多かったことを意味します。一方、

▶「ローソク足」の基本



上昇や下落だけでなく、ボディやヒゲの長さから相場の強弱を計ることができる優れたもの

上ヒゲが非常に長く伸びたときは、下ヒゲの解説と逆に考えてください。

ちなみに、下落しているにもかかわらず新規買いとすることを突っ込み買い、同様の状態で売りポジションを決済することを買い戻しといいます。また、一定の上昇を見たあとに長い上ヒゲを伸ばしたり陰線が出現したりするときのことを（利益確定の）売りに押されるといいます。

このように、たった1本のローソク足を見るだけで、相場の強弱を計ることができます。江戸時代に米相場で財をなした本間宗久は、数本のローソク足を組み合わせることで、相場の強弱と方向を見極める方法を編み出しました。ただし、レバレッジを利かせて取引をするときには、より短期間のトレードが求められるため、数本のローソク足だけで判断するのは難しいといえるでしょう。

そこで、一定期間のローソク足を見て、相場の流れを把握することが重要になります。相場の流れ（向き＝方向性）のことを「トレンド」といいますが、外国為替相場を読み解く上では、これに着目する必要があります。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

003

チャート分析の基本は トレンドを見極めること

相場の流れという、分かるような分からないような感じがするかもしれません。相場を流れで捉えないと、上か下かにかける「ギャンブル」になってしまいます。FXをただのギャンブルにするのか、それとも、まっとうな投資にするかは、チャートを使いこなせるかどうかにかかっています。

「トレンドに着目する」というと、なんだか難しそうに聞こえるかもしれませんが、ご心配なく。相場は基本的に「上がるか、下がるか」です。一定期間上がる＝上昇する相場を「**上昇トレンド**」、その逆の**下落する相場**を「**下降（下落）トレンド**」といいます。もう1つ、**上がりもしないし、下がりもしないで一定の値幅を行き来する「横ばいトレンド**」というのがあります。まずは**上昇トレンドと下降トレンド**を覚えましょう。

株式や商品相場にもトレンドはありますが、特に外国為替相場では「**トレンド**」が重視されます。2つの国の通貨ペアを取引するのが外国為替取引ですから、どちらかが強くなれば、もう一方は弱くなります。その理由が金利だったり、通貨の供給量だったり、景気の善し悪しだったりします。

チャートを見ると、トレンドは一目瞭然。一般的には、ファンダメンタルズ分析を基礎に、チャート分析で**トレンドを確認し、買いか売りか**と、その**タイミングを決めること**になります。また、**買いならいくらで買うか、どこまで上昇したら決済するか、ストップロスオーダーをどこに置くべき**

▶「相場の流れ＝トレンド」の基本



上昇トレンドのときに
買うか売るか？

買い = 順張り

売り = 逆張り



下降トレンドのときに
買うか売るか？

買い = 逆張り

売り = 順張り

..... 為替レートの動き



相場の流れ＝トレンドに
付くのが基本。だから、
チャートは**トレンドを重視**
して分析するのが大切



かもチャート分析から導き出します。

▶▶相場の流れ＝トレンドに付くのがトレードの基本

トレンドを見極めてトレードするときに、まず**スタンスを決めなければ**なりません。**トレンドに付く、つまり「順張り（トレンドフォロー）」**にするか、**トレンドに対して逆のポジションを取る「逆張り」**にするかです。

トレンドを形成するといっても、**上がり続けたり、下がり続けたりするわけでは**ありません。上昇すれば一定の**下落**、下落すればまた**上昇**するというように、**タイミングは別にして、ジグザグを描きながらトレンド**ができあがります。

外国為替相場は「**トレンドが出やすい**」ため、「**順張り**」がトレードの基本となります。ただし、**逆張りは厳禁**というわけではありません。横ばいトレンドのときは「**順張り**」より「**逆張り**」が効果的な場合もあります。この点を踏まえながら、**トレンドについて掘り下げてい**きましょう。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

004 トレンドラインを引いて 相場のトレンドを把握する

相場の方向性、それが「トレンド」。特に外国為替相場は、トレンドが出やすいといわれています。となれば、トレンドを把握し、それに沿ったトレードをすることが大切です。トレンドライン分析は、チャート分析の中でも定番中の定番。まず、これをしっかりマスターしましょう。

トレンドはチャートを見れば一目瞭然ですが、問題はトレンドの「角度」です。そして、どの程度のジグザグ、つまり「振幅」で相場が動いているのかを確認することが必要です。といっても、見た目で角度や振幅を測るわけではありません。「トレンドライン」と「チャンネルライン」という線を引いて、できるだけ正確に角度と振幅を把握します。

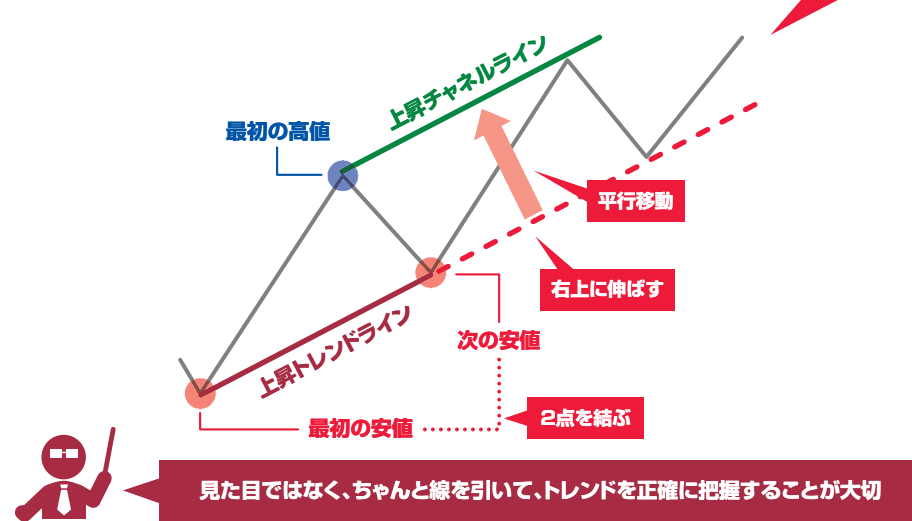
FX会社が提供するチャートには、描画ツールが備わっていますから、それを使ってトレンドライン、チャンネルラインの順に引きます。

▶▶トレンドラインとチャンネルラインがチャート分析の基本

最初に、トレンドラインの引き方を説明しましょう。まずは、上昇トレンドラインからです。チャート上の「最初の安値」と「次の安値」を見つけて、その2点を結び、右上に伸ばします。最初の安値は基本的に一定期間の最も安いポイントを選べますから、それほど問題ではありません。ところが、「次の安値」がくせ者です。

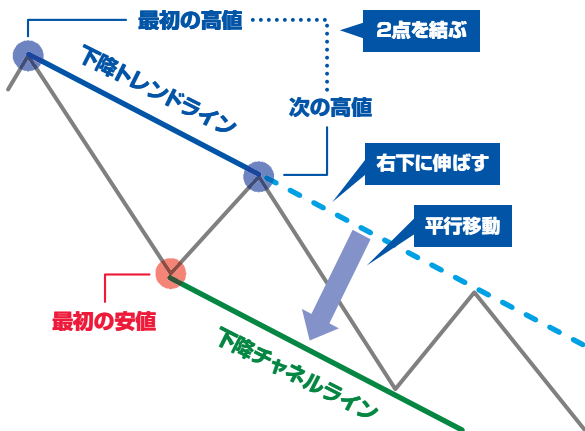
▶「上昇トレンドライン」と「上昇チャンネルライン」の引き方

トレンドラインは角度を、チャンネルラインは振幅を把握するのに役立つ！



▶「下降トレンドライン」と「下降チャンネルライン」の引き方

トレンドラインは角度を、チャンネルラインは振幅を把握するのに役立つ!



トレンドラインとチャンネルラインが、後々の相場の予測に重要な役割を果たす



前ページの図のように、最初の高値から上昇して高値をつけて下落し、2回目の安値をつけて反転上昇するポイントが「次の安値」です。この場合、最初の高値より次の安値が水準的に高い位置にあることが、上昇トレンドの前提になります。そうでないと、トレンドラインは右肩上がり＝上昇にならないからです。

一方、下降トレンドラインはその逆。チャート上の「最初の高値」と「次の高値」を見つけて、その2点を結び、右下に伸ばします。左の図のように「次の高値」は、最初の高値から下落して安値をつけた後に上昇し、2回目の高値をつけて反転下落するポイントです。最初の高値より次の高値が低い水準にあるのが下降トレンドの前提になります。

チャンネルラインは、上昇、下降のトレンドラインを平行移動します。どこに移動するかですが、**上昇トレンドでは最初の高値から上昇して高値をつけたポイント**、**下降トレンドでは最初の高値から下落して安値をつけたポイント**です。これでトレンドの角度と振幅が分かるようになります。



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

005

トレンド&チャネルラインを使ってタイミングを計る

トレンドラインを引いたときに、欠かせないのがチャネルラインです。チャート上に、この2本の線を引くことによって、トレンドだけでなくトレードのタイミングを計ったり、トレンドの変化をいち早く察知したりできるようになります。決して軽視してはいけない重要なツールなのです。

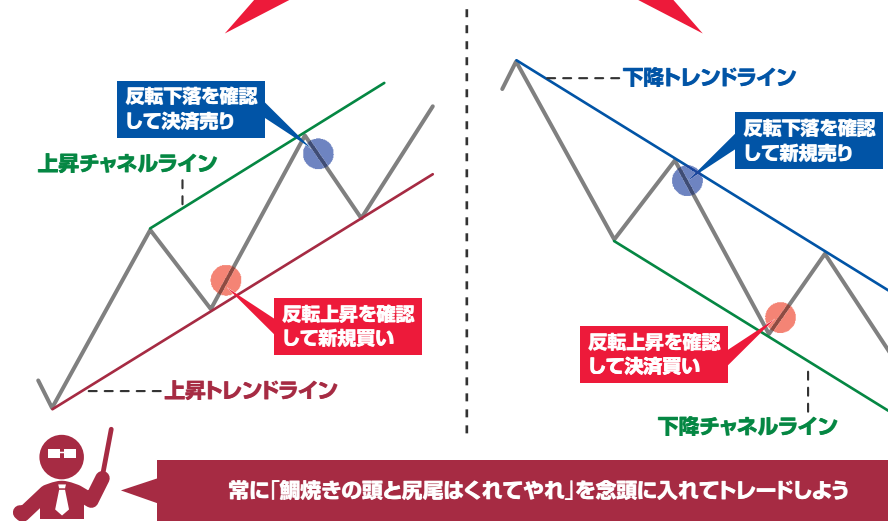
トレンドラインとチャネルラインを引くことで、トレンドの角度と振幅が分かるようになると、仕掛け（新規）や手仕舞い（決済）のタイミングを計ることができるようになります。また、振幅の大小からトレンドの変化をあらかじめ察知することもできます。まず、タイミングの計り方から解説しましょう。

▶▶ 鯛焼きの頭と尻尾はくれてやれ

たとえば、上昇トレンドラインを引くときには、2回目の谷をどう判断するかが問題になります。下落の最中に1本の陽線が出現しただけで反転と決めつけるわけにはいきません。少なくとも数本は欲しいところです。しかし、分析のためではなく、実際にタイミングを計るとなると、3~4本の陽線の出現を待ってはいは仕掛けが大幅に遅れてしまいます。ということは、2本の陽線が出現し、しかも2本目の陽線が最後の陰線の高値を抜いてくれたときを、新規買いのタイミングとして考えるべきでしょう。

▶「仕掛け」と「手仕舞い」のタイミングの取り方

特に、トレンドラインで反転を確認しないと、逆方向へ動くリスクが高まる



手仕舞いのはときは、この逆。チャネルラインに到達して、しかも反転下落を確認して決済売りとします。チャネルラインに到達したときに決済すると、チャネルラインを突き抜けてしまう恐れがあります。要するに、利益がもっと大きくなるはずが、それを取り逃がすことになるのはもったいないですね。売りポジションを取るときも考え方は同じです。これが「トレンドフォロー戦略」という手法です。

まとめると、上の図のように、**トレンドラインと仕掛けの価格水準、チャネルラインと手仕舞いの価格水準の間には、少しですが「のりしろ」**があります。のりしろの部分「鯛焼きの頭と尻尾」にたとえて、「鯛焼きの頭と尻尾はくれてやれ」という相場格言が生まれました。

トレードするときには、たとえば、最安値で買いたい、最高値で決済したいと考えるのが人情。しかし、それは大切な資金を無用なリスクにさらしているだけです。**長く続けるには、「ちょっとだけ控えめなスタンス」が何よりも大切**だということを肝に銘じてくださいね。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

006

チャネルラインを使って トレンドの変化を先取りする

トレンドラインは上昇や下落を漠然と見るものではありません。トレンドには急激に上昇したり緩やかに上昇したりと、様々な性質があります。トレンドラインとチャネルラインから、トレンドの性質を見極めることによって、仕掛けだけでなく、手仕舞いのタイミングも計ることができます。

トレンドフォロー（順張り）戦略にとって、最大の敵は「**トレンドの変化**」です。トレンドの変化には2種類あります。1つは、**上昇から下落、下落から上昇にトレンドが変わる＝トレンドが転換**すること。もう1つは、**トレンドの角度が変わる**ことです。

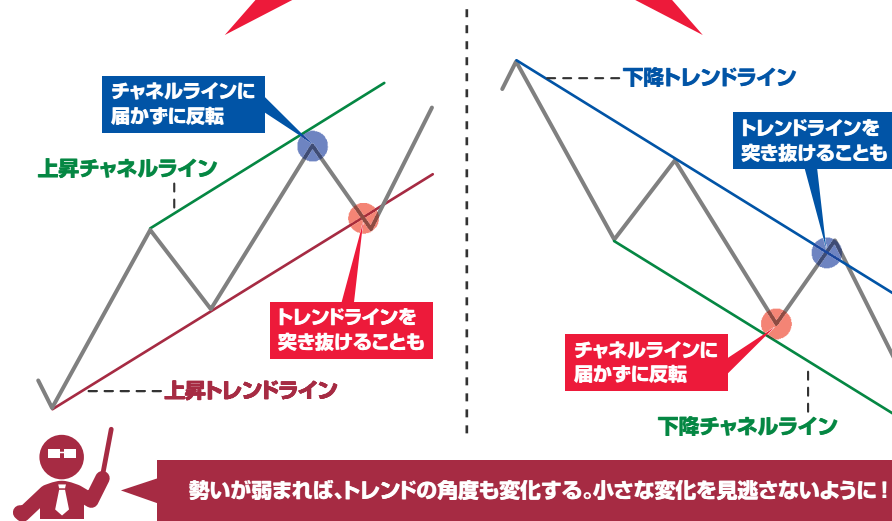
トレンドの変化を知るためには、「チャネルラインに着目」する必要があります。たとえば、ローソク足がトレンドラインで反転上昇し、チャネルラインに向かっていくとします。決済のタイミングは、チャネルラインに到達して反落したところでした。

▶▶チャネルラインに到達しなければ、トレンドの変化に警戒

ところが、チャネルラインに到達せずに反落したら？ この場合は、**早めに決済して利益を確定するだけでなく、トレンドラインを下に突き抜けることを警戒しなければなりません**。ちなみに、**トレンドラインやチャネルラインを上や下に突き抜けることを「ブレイク」と**いいます。

▶「トレンドの変化」を見極めるポイント

チャネルラインに届かなければ、トレンドが変化する可能性が高い



トレンドラインをそのまま下に突き抜けてしまえば、最低でもトレンドの角度が変化し、最悪ならトレンドが転換してしまうため注意が必要です。つまり、**チャネルラインは単にトレンドの振幅を測るだけでなく、トレンドの変化をいち早く察知するという役割もある**のです。トレンドラインを見ているだけでは、トレンドラインを下抜けたときに初めて、トレンドの変化を知ることになり、対応は後手に回ります。

投資家は、事前に想定していなかったことが起きると、「ちょっと下抜けただけで、すぐ元に戻るだろう……」と自分に都合の良い解釈をして結論を先延ばしにしてしまいます。こうしたことを起こさないためにも、「事前に察知する」「変化を先取りする」ことはとても大切です。

仮に、チャネルラインに到達しなかったからという理由で早めに利益確定をしたのに、その後、チャネルラインを突き抜けてしまったら……。投資家心理としては、「もっと儲けられたのに！！」と後悔しがちです。しかし、これは利益を取り損なっただけで、損失を被ったわけではありません。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

007 トレンドラインを下抜けると 元に戻るの簡単ではない

たとえばトレンドラインは、上昇トレンドのときに相場を支え、下降トレンドのときは相場の行く手を阻むという性質があります。トレンドラインやチャンネルラインを突き抜けると、これまでの性質が逆の立場に転じます。この点に着目すると、ワンランク上のトレードができるようになります。

FXで利益をあげるためには、負けないトレードを心がけることが最も大切です。前項では、「取り損ない」と「損失を被ること」について書きました。投資家の多くは「取り損ないを減らす」ことを重視し、「損失を被らないようにする」ことを軽視しがちです。

取り損ないを減らすために、できるだけ多くの利益をあげようとポジションを引っ張る、言い換えれば、最高値や最安値で利益確定を狙います。「このあたりまで上昇するはず」と決めてかかることが多いのが実情です。

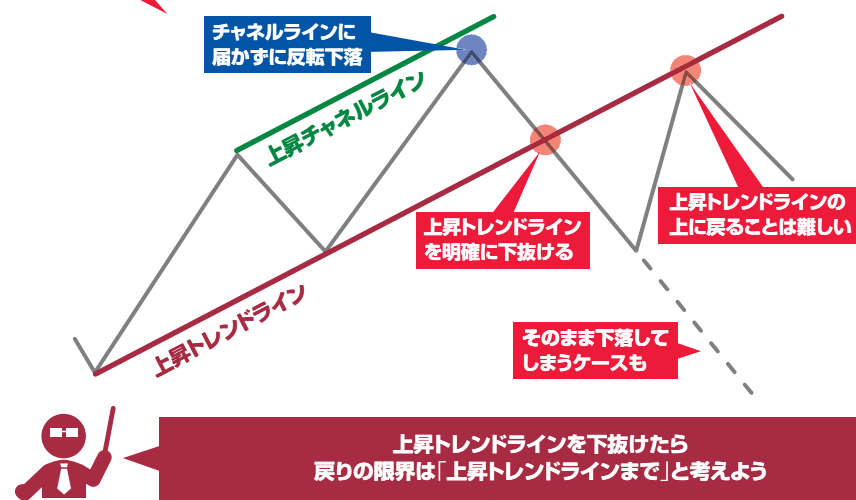
▶▶トレンドラインを下抜けると、それが相場の上昇を阻む

トレンドラインを引いてチャート分析をするときも、これと同じようにある意味で「決め打ち」をしてしまう投資家が多いようです。

たとえば、チャンネルラインに到達せずに反落し、トレンドラインも下方ブレイクしているにもかかわらず、「ちょっとぐらいのブレイクならトレンドは元に戻る」と決めてかかっているときです。

▶「上昇トレンドライン」を下抜けたときによく見られるケース

上昇トレンドラインを明確に下抜けると、元に戻ろうとする力が働くが…



トレンドラインを下抜けてしまうと、相場はトレンドラインの上に戻ろうとします。しかし、これがなかなか難しい。トレンドラインやチャンネルラインには、相場を支えたり、相場の行く手を阻んだりする性質があるからです。ちなみに、**相場を支える線を「サポートライン」、相場の行く手を阻む線を「レジスタンスライン」と**いいます。チャンネルラインに到達して反落するというのは、まさにこのメカニズムが働いているわけです。

話を元に戻すと、**これまで相場を支えていた＝サポートラインとして機能していたトレンドラインを下抜けると、その性格は転換します。**つまり、トレンドラインの役割はサポートラインからレジスタンスラインに転じて上昇を阻み、トレンドラインの上に戻ろうとするのを邪魔します。したがって、投資家が勝手に「元に戻るだろう」と考えても、トレンドラインまでが上昇（戻り）の限界となり、元の価格水準に戻らないケースが多くあります。そして、トレンドラインから離れてしまえば、損失が膨らんでしまいます。相場の動きを特徴的に捉えることが、チャート分析なのです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

008

トレンドラインを修正して トレンドの変化を確認する

トレンドと言っても、常に一定の角度で上昇したり下落したりするわけではありません。その時々の方場の勢いによってトレンドの角度も変化します。となれば、トレンドラインやチャンネルラインをブレイクしたら、その角度を測るために修正すると、トレンドが分かりやすくなります。

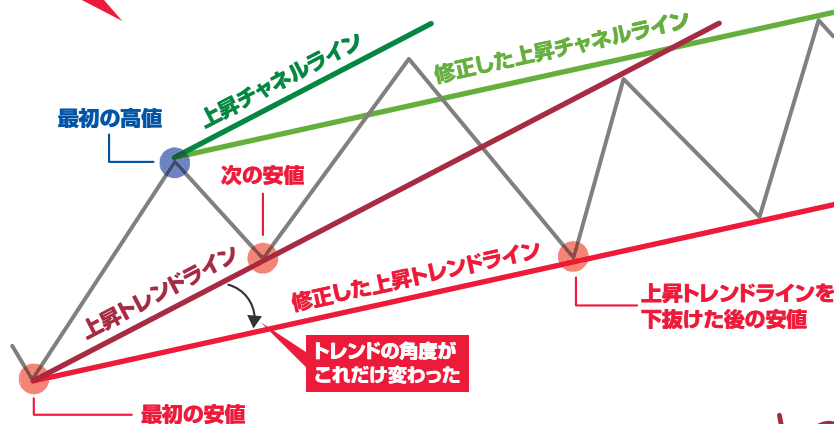
相場が上昇トレンドを形成しているときにトレンドラインを下抜ければ、それはサポートラインからレジスタンスラインに役割が転換します。そして、上昇(戻り)の限界がトレンドラインになると、上昇トレンドの角度はそれまでよりも小さくなります。

問題は、トレンドラインを下抜けた後に、上昇トレンドを維持できるのか、それとも下降トレンドに転換するのかです。トレンドラインを引くときの起点にした水準より上で再び上昇に転じれば、上昇の角度は小さくなったものの上昇トレンドは継続と判断します。ただし、**それまでのトレンドラインを引き直す、つまり「修正」する必要があります。**

最初に引いたトレンドラインの起点と、トレンドラインを下抜けてから上昇に転じたところ、つまり「谷」を形成したところを新しいトレンドラインの終点として結びます。こうすることで、新しいトレンドラインを引くことができ、これまでよりも上昇の角度が小さくなったことが確認できます。そして、修正したトレンドラインが新しいサポートラインとして機

▶「上昇トレンドライン」を下抜けたら、トレンドラインを修正する

上昇トレンドラインとともに、上昇チャンネルラインも修正する



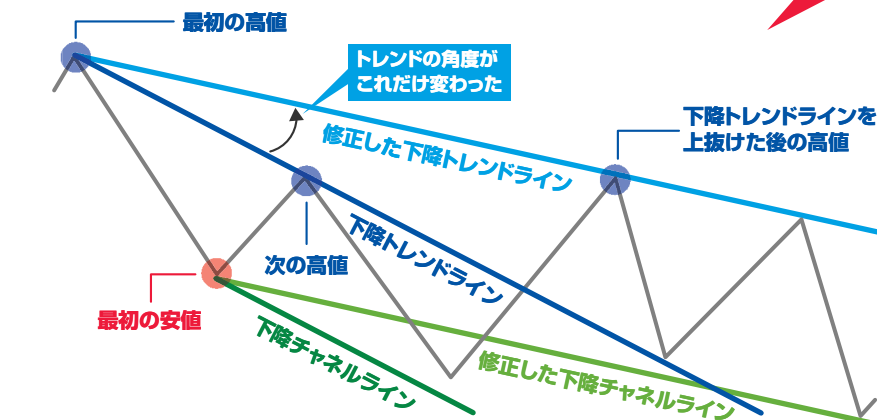
トレンドの変化(角度)をしっかり把握することが、後の相場予測に役立つ



●豪ドル/円 ●日足 ●2009.01.26~11.13 (チャート提供:GMOクリック証券 <http://www.foo.bz/click/>)

▶「下降トレンドライン」を上抜けたら、トレンドラインを修正する

下降トレンドラインとともに、下降チャンネルラインも修正する



トレンドを2回修正したら、横ばいトレンドか、トレンドの転換を想定する



能するかどうかを確認します。

あわせて、チャンネルラインも修正しなければなりません。トレンドラインの角度が小さくなる時は、チャンネルラインの起点はそのままで、修正したトレンドラインに平行する線を引き直します。したがって、修正したトレンドラインが1本で相場を支え、修正したチャンネルラインと最初に引いたトレンドラインがレジスタンスラインとして上昇を阻もうとします。2対1ですから、上昇の余地は限られる可能性が高いわけです。

▶▶トレンドラインの修正は原則、2回まで

ところで、チャート分析の世界では、トレンドラインの修正は、ローク足が最初に引いたトレンドラインの起点より上にあることを条件に、2回までとしています。これを「ファン理論」といいます。これは、2回の修正、つまりトレンドラインを3本引いた段階で角度のあるトレンドは消滅し、トレンドが横ばいになるケースが多いからです。



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

009

チャートの山や谷に引く サポート&レジスタンスライン

角度のあるトレンドラインやチャネルラインが完全に水平になったら？
これが本来のサポートラインやレジスタンスラインです。サポート&レジスタンスラインの使い方は幅広く、使いこなすにはちょっと時間がかかるかもしれません。しかし、相場の節目としては重要なものばかりです。

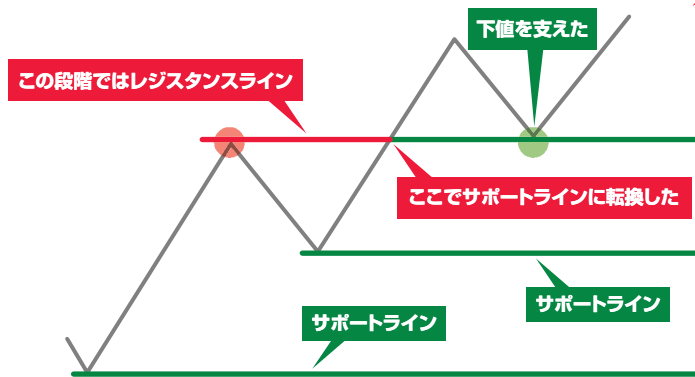
横ばいトレンドになったときも、トレンドラインやチャネルラインを引くことができます。ただし、定規で測ったような水平のトレンドラインというのは、ちょっとあり得ません。トレンドラインの終点と起点が、まったく同水準になることは非常に稀だからです。

そのため、起点と終点を結ぶというよりは、**上昇から反転下落したときの高値、下落から反転上昇したときの安値に水平の線を引く**ことで、後に同じような水準で下げ止まったり、上げ止まったりして、一定の値幅で動くことが後で分かる、それが横ばいトレンドです。

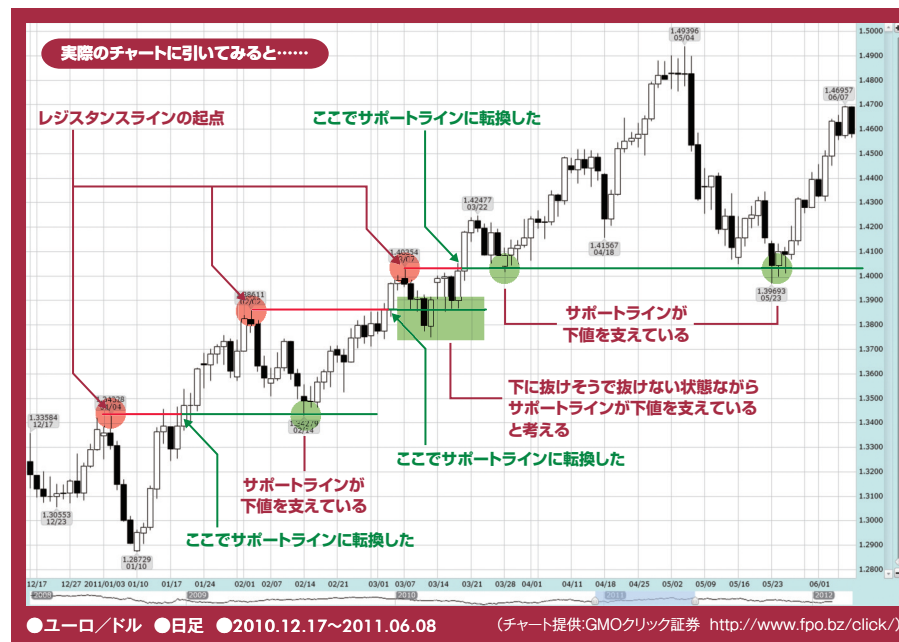
たとえば、**下落した後に反転上昇したところに、最初の水平の線を引きます**。その後は、この線をトレンドラインと同じように考えます。トレンドラインやチャネルラインの役割を解説したときに「**サポートラインとして機能**」と書きましたが、水平の線こそ、本来の「サポートライン」です。紹介の順序が逆になったのは、トレンドという考え方をまず、理解していただくためからです。

▶「サポートライン」と「レジスタンスライン」の基本①

上昇トレンドでは、特にサポートラインが機能するかに着目する



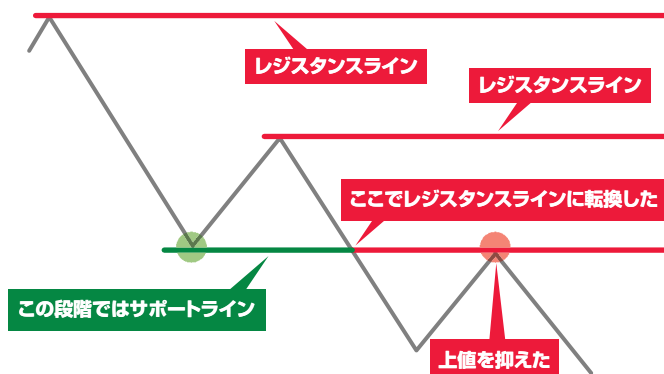
レジスタンスラインを上抜けるということは、それだけ買い圧力が強い証拠



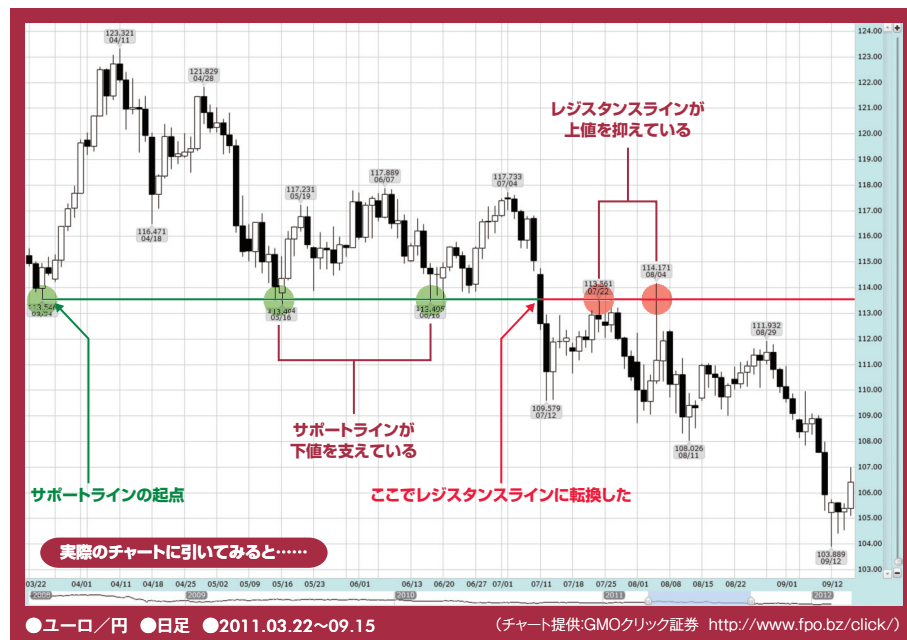
●ユーロ/ドル ●日足 ●2010.12.17~2011.06.08 (チャート提供:GMOクリック証券 <http://www.foo.bz/click/>)

▶「サポートライン」と「レジスタンスライン」の基本②

下降トレンドでは、特にレジスタンスラインが機能するかに着目する



サポートラインを下抜けるということは、それだけ売り圧力が強い証拠



一方、最初のサポートラインを引いてから順調に上昇。そして、いつかは必ずといっていいほど反落します。下落に転じたときの高値にもう1本、水平の線を引きます。これが本来の「レジスタンスライン」です。サポートラインとレジスタンスラインの範囲に収まって上げ下げを繰り返す相場が横ばいトレンド、別名、「ボックス圏相場」「レンジ相場」といいます。

▶▶サポート&レジスタンスラインの引き方はいろいろ

サポート&レジスタンスラインの特性は、トレンド&チャネルラインで解説したように上下にブレイクすることによって、その性質が転換します。問題は、どこにどう引けば良いかです。チャートの山を形成した高値や谷を形成した安値に引くというのが一般的ですが、実際に引こうとしても、チャートには山や谷はいくらでもあります。

そのため、一定のルールを決める必要があります。主だったところでは3つの引き方を覚えてください。それは次項で解説します。



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

010

サポート&レジスタンスラインを引く3つのルール

ここではサポート&レジスタンスラインの代表的な引き方を3つ紹介しましょう。まず、トレンドラインを引くときの起点と終点、チャンネルラインを平行移動する点に引くのが基本です。また、サポート&レジスタンスラインにも強弱があり、これを見極めて相場の反転ポイントを探ります。

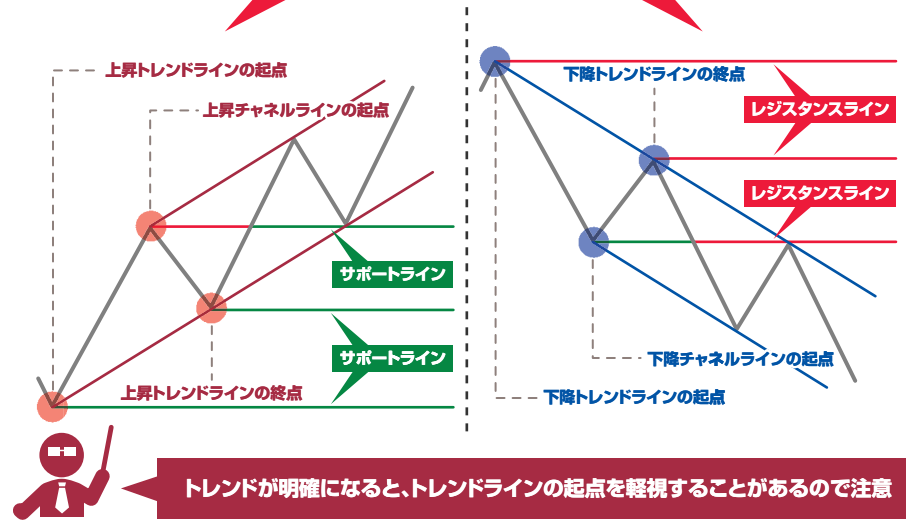
チャートを初めて見る方やチャート分析をしたことがない方は、サポート&レジスタンスラインの基本的な引き方を3つ覚えましょう。

最初は「**トレンドラインの起点と終点、チャンネルラインの起点（トレンドラインを平行移動する点）**」に引きます。チャートの表示期間によって上昇トレンドと下降トレンドの両方があるケースでは、合計6本のサポート&レジスタンスラインを引くことになります。

次に、ヒゲに着目します。「**非常に長いヒゲを伸ばした高値や安値**」に単独で引きます。非常に長いというと、日足なら始値に対して1.5~2%前後というところでしょうか。たとえば、100円の始値に対して、ヒゲの長さが1.5~2円という感じです。下ヒゲ陰線なら安値と終値の差、上ヒゲ陽線なら高値と終値の差と始値を比べることで判別します。余裕があれば、「**非常に長いヒゲを伸ばした方向の終値**」に引くと、相場の動きを把握するのに役立ちます。ただし、こうした長いヒゲはあまり多く出現することはありません。その分、チェックポイントとしては重要です。

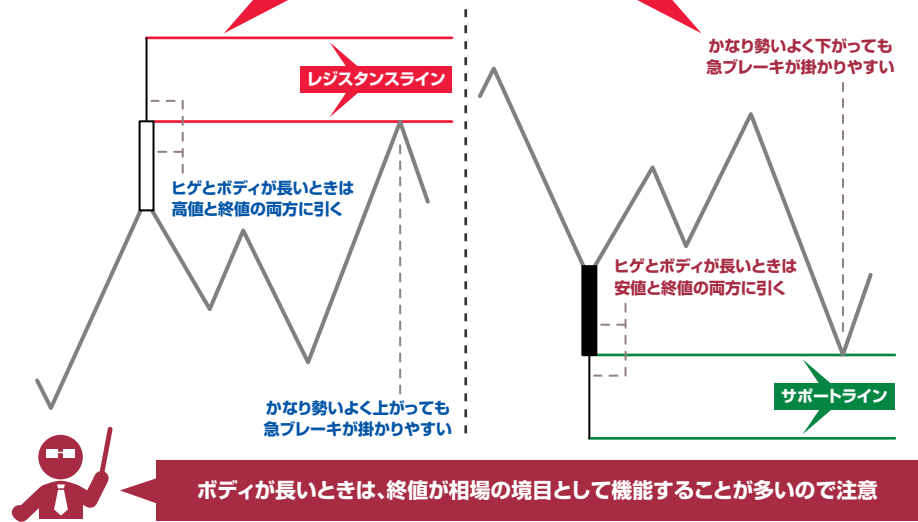
▶「トレンドラインの起点と終点、チャンネルラインの起点」に引く

まず、基本中の基本となる3本は必ず引く習慣を付けよう



▶「非常に長いヒゲを伸ばした高値・安値と始値・終値」に引く

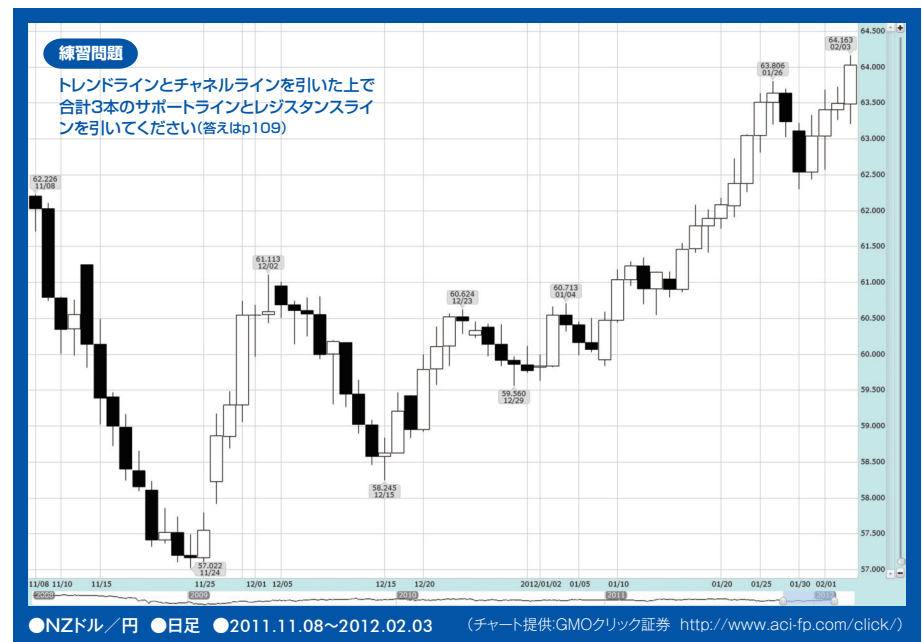
ボディとヒゲの両方が長いときは、必ずセットで引くようにしよう



もう1つは、「**チャート上の目立った山の高値、谷の安値**」に引きます。これは多少、感覚的なものになりますが、山や谷が大きいものを探してください。山の頂上や谷の底の部分に目立ったヒゲを伴っているケースなら、サポート&レジスタンスラインは引いておくべきです。ただし、1年程度のチャートでは、トレンドラインの起点や終点、チャンネルラインの起点にサポート&レジスタンスラインを引いていれば、その他のサポート&レジスタンスラインは多くて2~3本もあれば十分でしょう。

▶▶サポート&レジスタンスラインの強弱

ところで、サポート&レジスタンスライン、トレンド&チャンネルラインには強度があります。3つの引き方はいずれも強い部類に入りますが、トレンドラインの起点が大きな谷で、長いヒゲを伸ばしていれば一段も二段も強度は上がります。強度を判定するスキルは、実際に線を数多く引いて、感覚を徐々に養っていきましょう。



第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

011

数値でしっかり管理できる テクニカル指標

パソコン画面上のチャートに実際に線を引いて分析する手法に対して、為替レートを使って様々な方法で計算した結果をグラフ化して数値的に判断するのがテクニカル指標です。これは、相場の方向性を見る「トレンド系」と、相場の勢いに着目した「オシレーター系」に分けることができます。

トレンド&チャンネルラインや、サポート&レジスタンスラインを引くときの判断は、投資家の裁量に委ねられています。そのため、1人ひとりの投資家によって引き方は違い、それに伴ってトレードの判断も異なる可能性があります。したがって、相場の展開次第では十分なトレーニングと経験が必要となってくるでしょう。その反面、独自の分析手法やトレードのルールを作ることができますし、醍醐味もあります。

一方、数値で管理するテクニカル指標というものがあります。**テクニカル指標は、相場のトレンドを把握したり、見極めたりする「トレンド系」と、相場の勢いに着目した「オシレーター系」に大別されます。**一部、どちらにも属さない独立した指標もありますが、まず、この2種類があることを覚えましょう。ただし、**外国為替相場は多くの場合、トレンドが明確になるのが最大の特徴**です。そのため、トレンドラインの引き方から紹介を始めました。

となると、少なくともFXでテクニカル指標を使うのであれば、やはり

	トレンド系 テクニカル指標	オシレーター系 テクニカル指標
目的	相場の「方向性」を知る	相場の「勢い」を知る
長所	トレンド相場で 威力を発揮	一定幅のレンジ相場で 威力を発揮
短所	レンジ相場になると 機能不全に陥る	トレンドが明確になると 機能不全に陥る
トレード シグナル	サポート&レジスタンスライン として使うか、数値を基準にする	複数の線の交差に着目するか 数値を基準にする
注意点	ローソク足が並んでしまうような べた風の相場になると信頼性はかなり揺らぐ	
代表的な 指標	移動平均線 MACD ボリンジャーバンド モメンタム	ストキャスティクス 移動平均乖離率 RSI DMI

「トレンド系」を使うのがベストでしょう。

▶▶テクニカル指標の代表格

トレンド系テクニカル指標の代表格は、「**移動平均線**」と、移動平均線を応用して作られた「**MACD**」、通称「マックディー」。本書では、移動平均線の見方と使い方を中心に解説し、MACDは補足的に紹介します。

オシレーター系テクニカル指標の代表格は、「**移動平均乖離率**」や「**ストキャスティクス**」「**RSI**」です。本書では、移動平均乖離率を中心に、残りの2つは紹介程度にとどめています。というものの、先ほども書いたように、トレンド系のほうが外国為替相場と相対するときにはより重要です。あれもこれも中途半端では、実戦で使いこなすことができないからです。さらにいえば、**2~3つの分析手法を深めたほうがはるかにパフォーマンスは上がります**。数少ない手法を深める過程でコツが培われますし、他のツールを使うときも、それが有効になるからです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

012

移動平均線はトレンドを測る 便利なツール

テクニカル指標で定番中の定番といえば「移動平均線」。入門したての投資家が必ず学ぶものです。このテクニカル指標の歴史は古く、プロの投資家も必ずといって良いほど使っています。移動平均線は分かりやすい反面、とても奥が深い指標です。是非、使い方を極めてください。

トレンド系だけでなく、テクニカル指標の代表格が移動平均線です。「移動平均線」とは、移動平均という数値を結んで折れ線グラフにしたものです。それでは「移動平均」は？ チャート分析の世界で多くの場合は、終値を基準にします。

たとえば、5日間の移動平均なら5日前からの終値をすべて足して、5で割った数字が前日までの移動平均です。具体的に簡単な数字で事例を解説しましょう。

5日前からのドル/円の終値が、80円、82円、81円、83円、84円だとします。この終値を全部足して5で割ると、 $(80円 + 82円 + 81円 + 83円 + 84円) \div 5日間 = 82円$ （5日前から前日までの移動平均）となります。

今日の終値が85円だとすると、最初の80円の代わりに85円を加えて、同じように5で割ります。したがって、 $(82円 + 81円 + 83円 + 84円 + 85円) \div 5日間 = 83円$ （4日前から今日までの移動平均）となります。これを繰り返すことで、移動平均を線で結び、チャート分析に役立てます。ち



なみに、5日分の終値を基準にするのは「5日移動平均線」、25日分なら「25日移動平均線」で、5日や25日といった計算期間を周期といいます。ここでは移動平均線の仕組みを理解していただくために計算式を挙げただけで、実際にはチャート上に表示されますから、面倒な計算は不要です。

▶▶ 移動平均線は常時3本の表示が基本

ベテランになると、移動平均線の使い方もいろいろ工夫しますが、初心者の方は、まず3種類の移動平均線を表示するようにしましょう。3本でも何が何だか分からなくなりそうという方は、2本でも大丈夫です。

2本や3本って何を表示するのでしょうか。「超短期」「短期」「中期」「長期」という異なる周期の移動平均線を使うと、相場の特徴を知ることができます。「これじゃあ、4本もあるじゃないか」と思われたでしょうけど、このうち、2本なら「短期と中期」、3本なら「短期、中期、長期」です。次項では具体的な周期とそれぞれの特徴について解説しましょう。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

013

サポート&レジスタンスライン
として移動平均線を使う

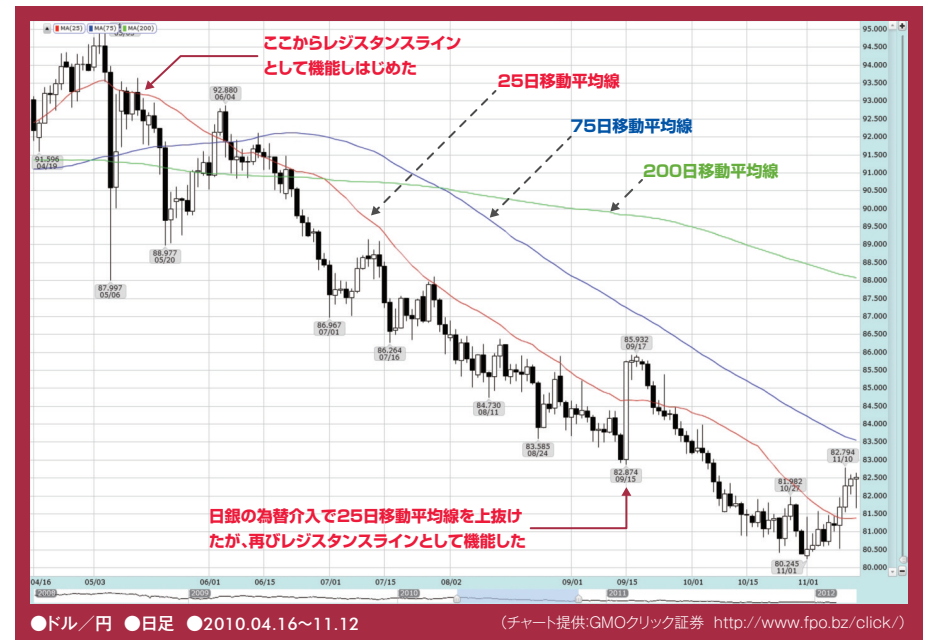
トレンドを把握する移動平均線は、サポート&レジスタンスラインとして使うことができます。このときの使い方は、トレンドラインやチャネルラインとまったく同じ。しかも、計算する期間の長短によって、信頼性や強弱を計ることができるトレンドラインにはない使い方もあります。

複数の移動平均線を使いこなす前に、まず1本の移動平均線を使えるようにしましょう。使い方は、大きく分けて2つです。1つは、移動平均線を「サポート&レジスタンスライン」として使う方法、もう1つは「移動平均線とローソク足の離れ具合」に着目する方法です。まずは、サポート&レジスタンスラインとして使う方法から解説しましょう。

▶▶ 周期が長いほど、移動平均線の信頼性が高まる

1本1本のローソク足の動きをつぶさに見ようとしても、それを継続的に行うのは無理なことです。そもそも相場は「点で見るよりも流れで見る」ことが重要なように、移動平均も日々の点で見るのではなく、それらを結ぶことで「トレンドを見る」ことが大切です。そういう意味では**トレンドラインと同じような使い方**ができるわけです。

トレンドラインは、チャネルラインと併用することで、相場の角度や振幅を測ることができました。1本の移動平均線では振幅を測ることができ



ない代わりに「**周期に着目したトレンド**」を把握することができます。

たとえば、25日移動平均線なら短期的なトレンドを知ることができ、200日移動平均線なら200日間、つまりほぼ1年間の長期的なトレンドを把握するのに役立ちます。

そして、相場の向きだけでなく、サポート&レジスタンスラインとして使うこともできます。チャート解説のレポートなどでは、「**25日移動平均線がサポートラインとして機能して相場を支えた……**」などと書かれています。つまり、移動平均線よりローソク足が上に位置しているケースでは、移動平均線が相場を支える可能性が高く、移動平均線よりローソク足が下に位置していれば、相場の行く手を阻む可能性があると考えます。また、**ローソク足が移動平均線をブレイクすれば、その性格が転換する**のも、トレンドラインなどと同じメカニズム。加えて、周期が長いほどサポート&レジスタンスラインとしての信頼性が高いのが一般的ですから、中長期の移動平均線も表示する必要があるわけです。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

014 周期の異なる移動平均線の特徴を理解しよう

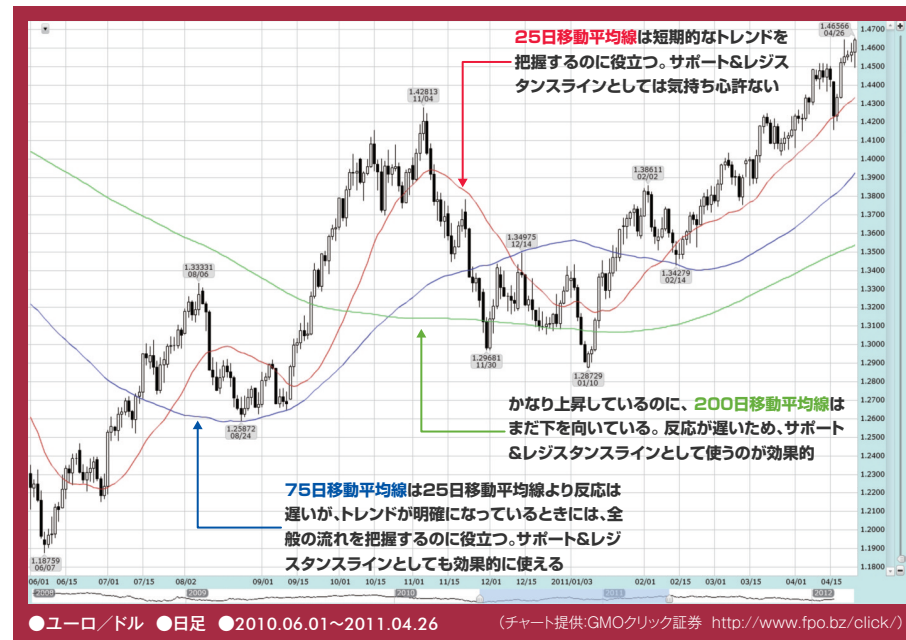
複数の移動平均線を表示しておくことで、短期、中期、長期のトレンドを把握することができます。周期が違えば、移動平均線が持つ性質もちよつとずつ異なります。その特性を理解して使いこなせるようになると、チャート分析やトレードの質は格段にアップします。

移動平均を計算する期間が長かったり短かったりすることで、何が変わるのでしょうか。仮に1日移動平均線を表示した場合、これは毎日の終値を線で結んだグラフになるだけです。この場合、4つの情報を含むローソク足の特徴がなくなってしまい、相場の勢いが分からなくなるだけでなく、上げ下げばかりが気になりますし、そもそもローソク足と併用する意味がなくなってしまいます。

▶▶ 役割が異なる短・中・長期移動平均線

たとえば、計算期間を25日間とする25日移動平均線は、**細かな振幅がなくなるものの、日々の大きな動きには比較的反応**します。そのため、短期移動平均線は、相場の短期的な動きを捕捉するのに役立ちます。サポート&レジスタンスラインとしても十分に機能しますが、中長期移動平均線に比べて、信頼性は一段落ちます。

一方、計算期間がもう少し長い中期移動平均線は、より滑らかな線を描



きます。最も基本的な周期は75日間。75日移動平均線の特徴は、**25日移動平均線に比べて、相場に対する反応が鈍い**ため、1日だけ何かの理由で急騰したり急落したりしてもほとんど反応しません。一方、**中期的なトレンド**が分かりやすく、はっきりとした**トレンド**が出ている場合は、**サポート&レジスタンスラインとして最も重要**です。

最後の長期移動平均線は、200日間を使うのが多いようです。200日間の平均ですから、期間は約1年に及びます。そのため、**相場の変動に対する反応は非常に遅く、トレンドが転換しても、しばらくは逆方向を向いていることのほうが多い**くらいです。また、明確な**トレンド**が出ているときにはほとんど使い道はありませんが、何らかの理由で急騰や急落をしたときは、**サポート&レジスタンスラインとして機能することが多く**、短中期の移動平均線に比べて**圧倒的な存在感を示す**のが最大の特徴といえます。

なお、ここでは**25日、75日、200日**を例に挙げましたが、FXの世界では、**21日、89日、200日**を組み合わせて使うプロも多いようです。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

015

1本の移動平均線を使って トレードのタイミングを計る

トレンドラインとチャンネルラインでトレードのタイミングを計りましたが、この移動平均線でも、タイミングを計ることができます。1本だけを使うときと2本以上を使うときなどバラエティーがありますので、一通りの仕組みを理解したら、ご自身が使いやすい方法を採用してください。

周期の異なる移動平均線の特徴を理解したところで、もう少し具体的な使い方を解説しましょう。ここでは短期移動平均線を中心に話を進めます。

移動平均線は、その向きに着目しながら、サポート&レジスタンスラインとして使います。もう1つの使い方は、**移動平均線よりローソク足が上にあるのか、下にあるのか、そしてどのくらいの割合で離れているかに着目**します。これが「**移動平均乖離率**」で、単位は「%」。ちなみに、移動平均乖離率も、いちいち計算する必要はなく、チャートの設定画面を使えば、自動的に表示されます。

周期にかかわらず、**移動平均線よりローソク足が上であれば相場は強く、下であれば相場は弱い**と判断します。ただし、周期が短ければ、その強弱は短期的に終わるケースが多いため、位置関係だけで判断しても精度が落ちます。しかし、これをトレードのタイミングとして活用することができます。たとえば、移動平均線を上回った段階で新規買い、下回った段階で決済売りという具合にです。



この**最大の欠点は、着目する移動平均線に一定の角度、つまりトレンドが出ていないと、利益を獲得することができないこと**です。ところが、これをちょっと応用すると、利益確定の確実性は増すことになります。

▶▶ 移動平均乖離率が大きくなったら決済

応用はこんな感じです。**移動平均線を上抜けたら新規買いとして、移動平均乖離率が一定のプラス乖離に到達したら決済売りとする方法**。ローソク足の期間や通貨ペアによって、目標とする移動平均乖離率は異なります。逆に言えば、その特徴をあらかじめ把握しておけば、トレードのタイミングを計るツールとしては高い信頼を置くことができます。売りで利益をあげようとするれば、**移動平均線を下抜けた段階で新規売りとし、移動平均乖離率が一定のマイナス乖離に到達したら決済買い**とします。

日足ではチャンスは限られますが、1時間足や30分足など短い期間のローソク足を使うとトレード回数（チャンス）を増やすことができます。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

016

2本の移動平均線を使って
トレードのタイミングを計る

FXはトレンドが命。トレンドが出るときに、いかに多くの利益を獲得するかが勝負の分かれ目になるからです。周期の短い移動平均線と長い移動平均線が入れ替わるとき、トレンドが転換することがあります。そして、これに着目すると、トレードのタイミングを計ることができます。

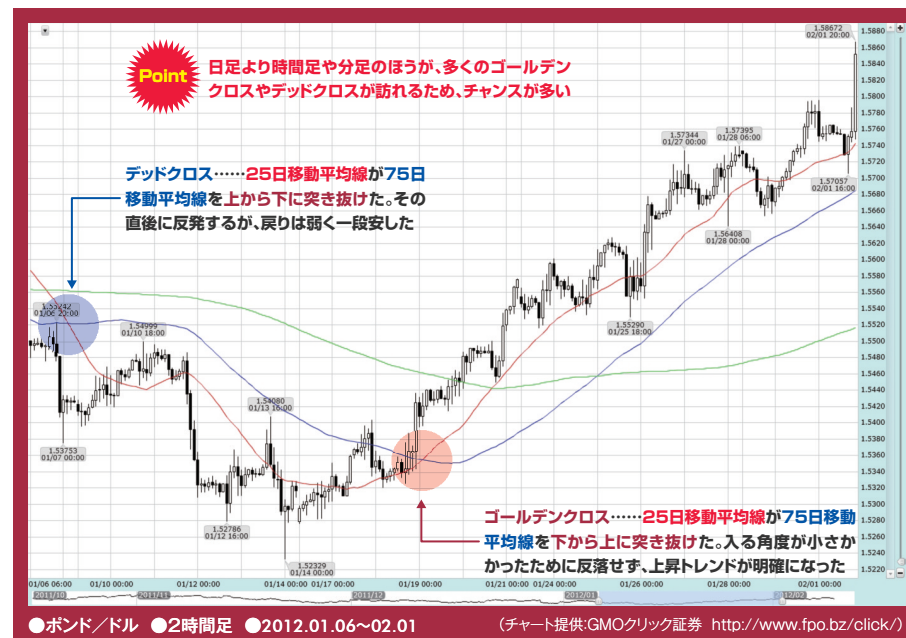
移動平均乖離率は、1本の移動平均線を軸にするシンプルな手法でした。この最大の特徴は、トレンドがはっきりしているかどうかに関係なく使えることです。反面、トレンドが変わったことを把握するのは苦手です。

そこで、2本の移動平均線を使ってみましょう。トレンドが明確になりやすい外国為替相場では、トレンドの転換をいかに察知するかが重要な課題です。トレンドが明確になったときに「しっかり稼ぐ」ことが、FXの醍醐味であり、継続的に利益をあげる秘訣でもあります。

▶▶ 短期×中期の移動平均線のクロスに着目する

2本の移動平均線を使う場合、一般的に短期×中期の移動平均線に着目します。そして、どこに着目するかというと、**2本の移動平均線がクロスして、位置関係が逆転するタイミングをトレンド転換**と見なします。

たとえば、25日移動平均線が下、75日移動平均線が上に位置しているとしましょう。そして、はっきりとした上昇相場になると、ローソク足が25



日移動平均線や75日移動平均線を上抜き、それに遅れて、**25日移動平均線が75日移動平均線を下から上に突き抜けます**。これを「**ゴールデンクロス (GC)**」といいます。

逆に、25日移動平均線が上、75日移動平均線が下に位置しているとき、下落相場になると、ローソク足が25日移動平均線や75日移動平均線を下抜き、それに遅れて、**25日移動平均線が75日移動平均線を上から下に突き抜けます**。これを「**デッドクロス (DC)**」といいます。2本の移動平均線がクロスしたことをトレンド転換のシグナルとして使うわけです。

GCやDCを使うときの注意点は、短期移動平均線の角度。下から上、上から下に突き抜ける角度が大きいくほど、クロスした直後に反転しやすい性質を持ちます。これは、移動平均乖離率がかなり大きくなっているからと考えられます。また、移動平均線はローソク足を後追いするため、一時的に目先の高値や安値をつかんでしまうことがあります。こうしたケースでは、一呼吸置くか、最低でも乖離率が縮小するまで待つと効果的です。

017

中長期移動平均線の 向きに着目して精度を上げる

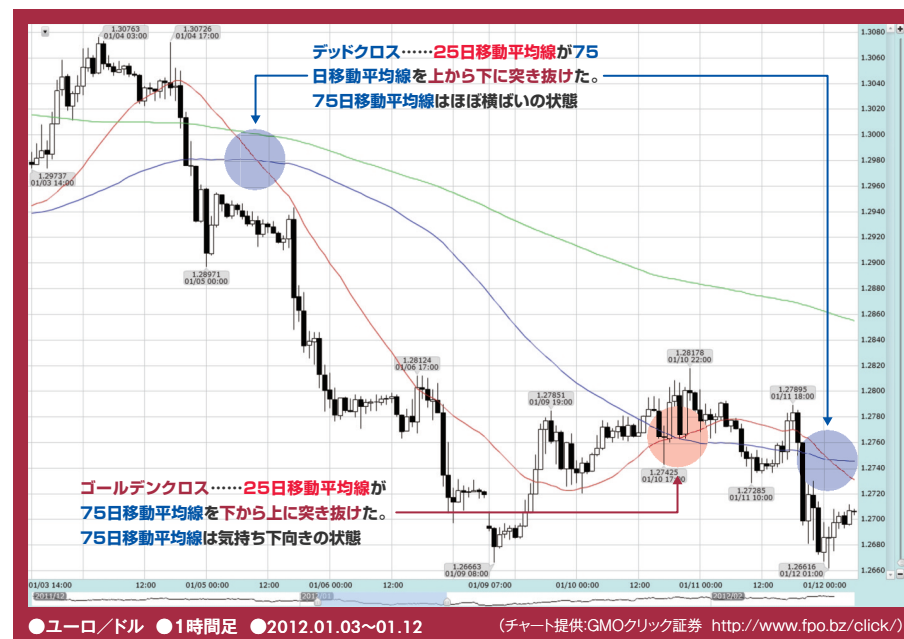
周期の異なる移動平均線は、それぞれに特徴があります。ゴールデンクロスやデッドクロスでは、短期移動平均線の角度に着目すると、想定外の損失を避けられます。また、中・長期移動平均線の「向き」に着目すると、その精度を上げることができます。

GCとDCは、トレンドの転換を察知し、トレードのタイミングを計る上で有効です。しかし、前項の最後で書いたように、多少アレンジして使わないと、その恩恵に浴することはできません。

そこで、もう少し精度を上げる方法はないのでしょうか。そのためには、2本の組み合わせのうち、中期や長期の移動平均線の向きに着目しましょう。25日×75日の移動平均線を使うときは、75日移動平均線の向きに注意を払います。75日移動平均線が上を向いているときは、中期的なトレンドは上昇です。しかし、DCによってトレンド転換の可能性が高まります。このときは、最低でも25日移動平均線までの反転上昇を待って売りポジションを取ると、含み損を抱えるリスクを限定することができます。

▶▶中・長期移動平均線の向きと相場の方向が同じなら高信頼性

ここではあえて、ちょっと難しい展開を示しました。何を言いたいかというと、中長期移動平均線の向きと相場の方向が重要なポイントになりま



す。DCをしたとき、中・長期移動平均線が下を向いていれば、そのDCは信頼できる可能性が高いというわけ。GCのときは向きが逆になります。ちょっと難しいかもしれませんが、まずクロスの基本を整理しましょう。

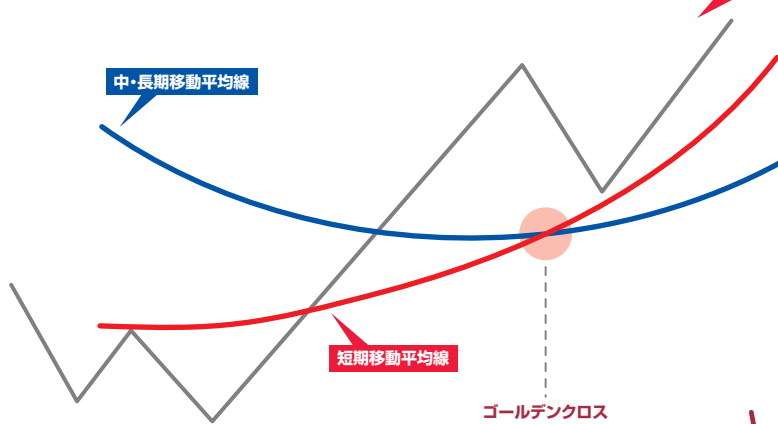
- ①中・長期移動平均線が上向きのGC……信頼性が高い
- ②中・長期移動平均線が下向きのGC……信頼性があまり高くない
- ③中・長期移動平均線が下向きのDC……信頼性が高い
- ④中・長期移動平均線が上向きのDC……信頼性があまり高くない

この4つのケースに、短期移動平均線の角度を確認することを付け加えると、トレードのタイミングを取るときの精度は格段に上がります。

すごく簡単に儲かりそうな気がしてきたのではないのでしょうか。ただし、注意していただきたいことがあります。頭の中で描いたイメージと実際のチャートでタイミングを計るのとでは、似て非なるもの。実践に移る前に多くのチャートを見て、このメカニズムを確認してください。相場に相対すると「欲」が邪魔をします。しっかり、トレーニングを積みましょう。

▶ 上昇転換の信頼性が「高い」ゴールデンクロス

実践的には中・長期移動平均線の向きは横ばい程度が好ましい

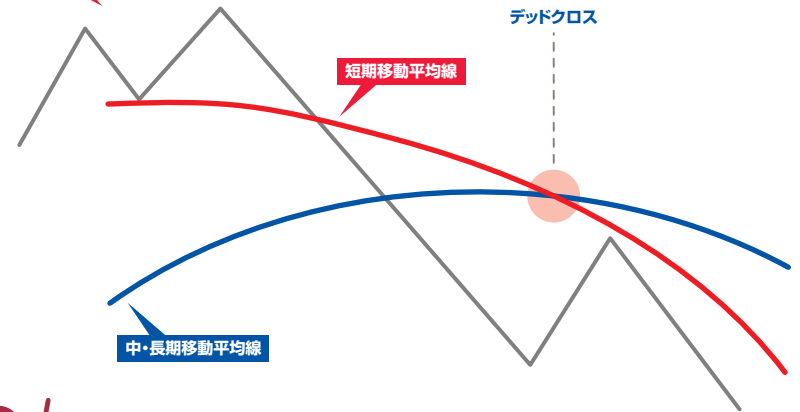


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、反落を待ってからが安全



▶ 下落転換の信頼性が「高い」デッドクロス

実践的には中・長期移動平均線の向きは横ばい程度が好ましい

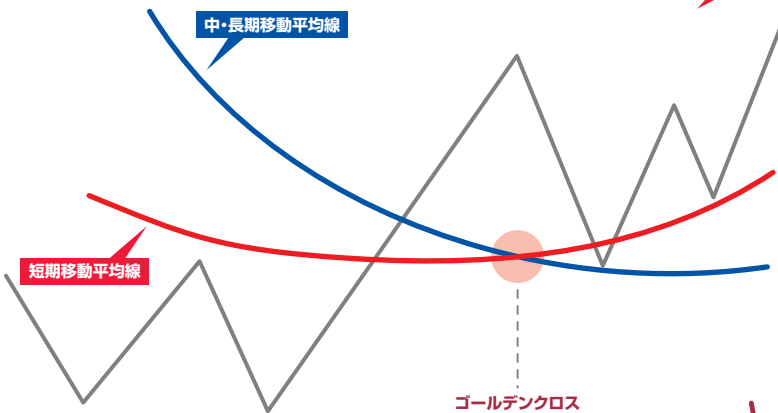


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、反騰を待ってからが安全



▶ 上昇転換の信頼性が「あまり高くない」ゴールデンクロス

実践的には中・長期移動平均線が下向きのケースが圧倒的に多い

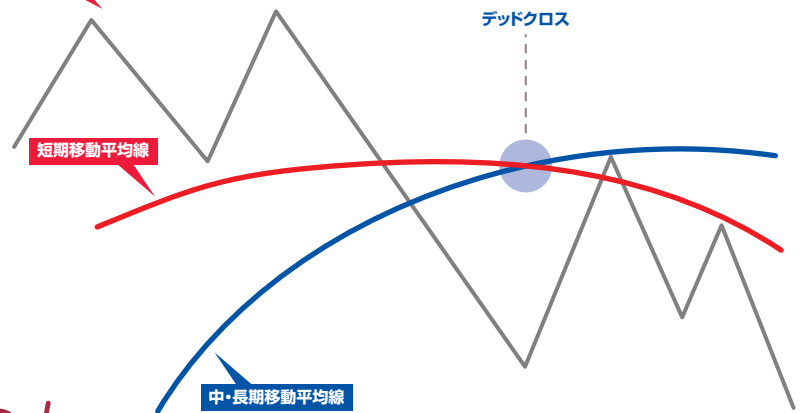


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、中・長期移動平均線までの反落を待つ



▶ 下落転換の信頼性が「あまり高くない」デッドクロス

実践的には中・長期移動平均線が上向きのケースが圧倒的に多い



短期移動平均線の入る角度が大きいときは、中・長期移動平均線までの反騰を待つ



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

018

見やすさが 個人投資家に人気のMACD

移動平均線を発展的に開発されたのがMACDです。移動平均ベースです
からトレンド系ですが、相場の勢いを見ることもできる優れもので、オシ
レーター系指標として扱われるときもあります。チャートの外に表示され
るグラフが見やすく、個人投資家から絶大な人気を博しています。

移動平均は正確には「単純移動平均」、英語で「Moving Average」と
いいます。これに対して、直近にウェイトを置いて計算する「指数平滑移
動平均」というものがあり、これを使ったのがMACD（通称、マックデ
ィー）。正式には「移動平均収束拡散法」という名前が付いています。ま
あ、2本の移動平均線を応用的に使うものと考えてください。

MACDの仕組みは小難しい計算式がありますが、ここでは割愛します。
設定さえすれば、自動的に表示されるからです。また、グラフが見やすく
使いやすいことから個人投資家の間で人気です。

▶▶ 2本の移動平均線が収束・拡散する点に着目

一般的に12日間と26日間の指数平滑移動平均線の差（乖離）が「MACD」、
9日間のMACDの指数平滑移動平均が「シグナルライン（SIG）」で、こ
の2本がローソク足チャートとは別枠で表示されます。何か、すごく難し
そうですが、使い方はいたってシンプルです。



MACDがSIGを下から上に突き抜けたときが買いシグナル、上から下に
突き抜けたときが売りシグナル。たったこれだけです。

比較的短い移動平均線の乖離に着目しているだけに、トレンドの転換を
いち早く知らせしてくれるのが最大のメリット。また、2本の線がクロスし
た後でトレンドが明確になると、MACDは効果を最大限に発揮します。
ただし、横ばいトレンドに陥ると、MACDとSIGが頻繁にクロスしてしま
い機能不全に陥ることもあります。これが最大の弱点です。とはいえ、こ
れは何もMACDに限ったことではなく、移動平均線も、この後に紹介す
るオシレーター系のテクニカル指標も同様です。

ところで、MACDを別の角度でみると、おもしろいことに気がきます。
たとえば、高値を更新しているにもかかわらず、MACDとSIGが緩やかに
下落しているケースです。これは、すでに相場の勢いがなくなりつつあり、
その後、大きな下落に見舞われることが多くあります。これをダイバー
ジェンス（拡散）といって、相場の変化を先取りする方法として重宝します。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

019

買われすぎと売られすぎが 一目瞭然のストキャスティクス

一定値幅のレンジ相場になったとき、絶大な効果を発揮するのがオシレーター系指標です。オシレーター系指標を使うときには、買われすぎ、売られすぎに着目します。また、使い方次第では、相場が大きく崩れたり、底練りから上昇に転じるときを察知することもできます。

相場の性格は「方向性」と「勢い」に大別することができます。これまで解説してきたトレンド系テクニカル指標は、主に「方向性」に着目したものです。そして、「勢い」に着目したのが、ここで紹介するストキャスティクスを代表格としたオシレーター系テクニカル指標。ちなみに、前項で解説したMACDのダイバージェンスは逆張りに使えることから、オシレーター系の役割も果たす優れたものです。

▶▶買われすぎと売られすぎをトレードシグナルとして使う

オシレーター系のテクニカル指標は「買われすぎ」「売られすぎ」を判断基準に、その逆のポジションを取ることで、逆張りに適しているといわれます。中でもストキャスティクスは、MACDと同様、個人投資家に人気の指標です。「%K」と「%D」という2本の線が0（ゼロ）～100%のゾーンの中を行き来するというシンプルな仕組みで、相場の勢いが分かりやすいからです。ストキャスティクスは、**反応の速い「ファスト・スト**



キャスティクス」と反応の遅い「スローストキャスティクス」に分かれますが、FXではスローストキャスティクスを使うのが一般的です。

使い方を解説しましょう。まず、「%K」と「%D」の線が70～80%を上回ると買われすぎ、逆に30～20%を下回ると売られすぎと判断します。したがって、買われすぎのゾーンに入ったら新規売り、もしくは決済売りとし、売られすぎのゾーンに入ったら新規買い、もしくは決済買いとして、相場に対して逆のポジションを取るか、ポジションを解消するわけです。

精度を高めたいときは、たとえば、70～80%以上に達した後に、「%K」が「%D」を上から下に突き抜けたら新規売り、もしくは決済売りとします。一方、30～20%を下回ってから、「%K」が「%D」を下から上に突き抜けたら新規買い、もしくは決済買いとします。

言葉では難しそうに感じるかもしれませんが、上のチャートで示したように、グラフを見れば一目瞭然。スロー、ファストにかかわらず、ストキャスティクスは一定の値幅で動いたときこそ効果を発揮します。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

020

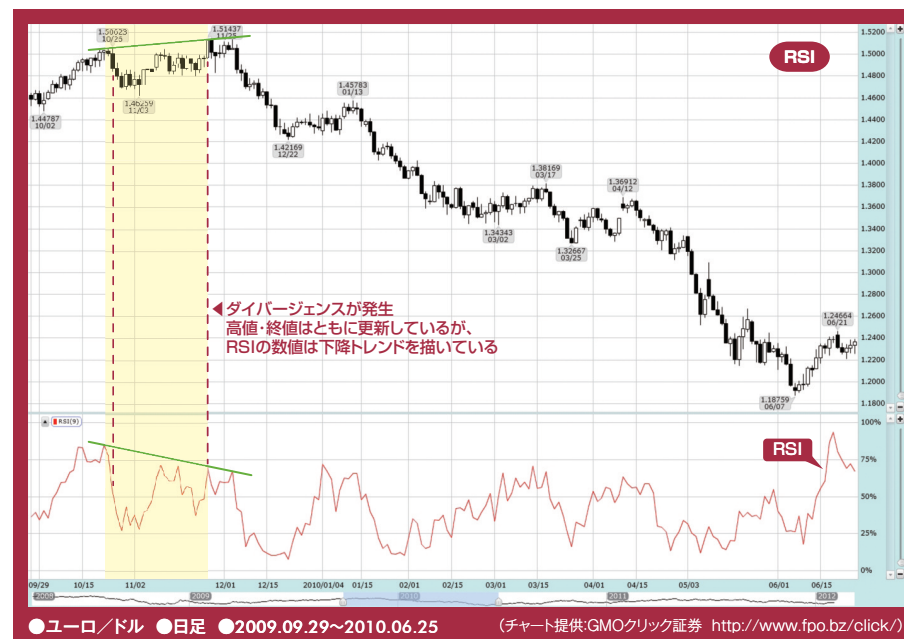
使いこなしが難しいRSIは
ダイバージェンスに注目する

シンプルなテクニカル指標は、分かりやすく見やすい反面、経験の多少によって使い方が大きく変わることがあります。つまり、シンプルな分、自由度が増すわけです。その代表格といえるRSIで最も使いやすい方法を紹介しますが、あなただけのオリジナルの使い方も探求してください。

最後に「RSI」というオシレーター系指標を紹介しましょう。RSIもストキャスティクスと同じように、買われすぎや売られすぎに着目します。仕組みは、一定期間で上昇と下落でどちらに勢いがあるかを、ある計算式で求めた数値を使います。数式アレルギーの方は、これだけでも身の毛がよだつかもかもしれませんね。

簡単に言えば、上昇するときと下落するときどちらが大きいかということです。グラフの見方は、ストキャスティクスと同様に**0（ゼロ）～100のゾーンの中で70～80を上回ると買われすぎ、逆に30～20を下回ると売られすぎと判断**します。ただし、RSIは線が1本しかないため、使いこなすには経験が必要ですし、トレンドがはっきりと出ている相場展開では、使い物にならないところが難点です。

また、短い期間のローソク足、たとえば、5分足や3分足では、短時間に一方通行の動きになると、RSIの線が上限の100まで振り切ったり、下限の0に張り付いたままだったりすることがある点には注意が必要です。



難点ばかりに見えるRSIをなぜ取り上げたのかというと、MACDで解説したダイバージェンスを見るのにはうってつけだからです。

▶▶ 波形のトレンドと実際の相場を比較する

RSIのダイバージェンスもグラフの波形に着目します。何しろ、線は1本だけですから、頻繁にクロスすることに紛らわされることなく、実際の相場とグラフの波形を比較するには適しています。

たとえば、RSIが最初は80まで到達していたのに、次の上昇では70までしか届かないとき、ここにトレンドラインを引きます。すると、トレンドラインは下向きなのに、ローソク足は相変わらず上方向へと動いているケースがあります。つまり、**実際の相場とRSIは逆行（ダイバージェンス）していること**になります。このときは、**相場が上昇しているにもかかわらず勢いが衰えていると判断**できます。下落相場への転換を見計らって新規売りを仕掛ければ、値幅取りも夢ではありません。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

021

チャート分析を使って トレードの成果を高めるには

「一芸に秀でる者は多芸に通ず」という言葉があります。これは、トレードやチャート分析のスキルを身に付けるときにも当てはまります。ちょっと使ってダメだったら今度はこっち。これでは、いつまで経っても使いこなすことはできません。これと決めたなら、とことん付き合ってください。

ここまで、チャート分析について解説してきました。まだまだ数多くのテクニカル指標やチャート分析の手法があります。入門したての方にとっては、早く実践で使ってみたいという期待感と同時に、今まで知らなかった知識を詰め込みすぎて「お腹いっぱい！」と感じているかもしれませんね。この章の最後に、チャート分析を使ってトレードの成果を高めるための心構えという姿勢について解説しておきたいと思います。ある意味で、これが最も重要かもしれません。

▶▶つまみ食いは厳禁。少なくとも良いから深く身に付ける

数あるテクニカル指標には、それを開発した人たちの思いが込められています。移動平均線では相場の急変動に対して反応が遅いため、それを解消したいとストキャスティクスやRSIを開発したのでしょう。

そのため、それぞれのテクニカル指標には長所と短所が必ず混在しています。ということは、**いくつものテクニカル指標を無造作に組み合わせ**

「一芸に秀でるものは多芸に通ず」というように、数少ない手法でも深く身に付けることがとても大切

トレンドライン
サポートライン
移動平均線
順張り
逆張り

将来は…
「勝ち組＝トレードを継続」の可能性

物事には必ず「一長一短」がある！
「ちょっとやってダメだから別の手法を試す」では、スキルアップは望めない

「あれもこれも」といいとご取りをしようとしても真逆のシグナルが出てしまえばお手上げ

RSI
移動平均線
順張り
逆張り


将来は…
「負け組＝トレードを断念」の可能性

自分自身は、あらゆるテクニカル分析の手法を駆使して、相場を操っている気分になっているが……実のところ「あてずっぽう」でトレードしているに過ぎない

あなたはどちらのタイプ？

深く身に付けることの大切さ

- ◎決めた手法を本当に信頼する
- ◎短所を理解しているため、負けを認められる
- ◎本当の意味で「勘」が働く
- ◎勝ちパターンが見極められる



しまうと、真逆のトレードシグナルを発してしまうケースがあります。せっかく、チャート分析の手法を身に付けても、最終的な判断は投資家の「勘」だけに頼ってしまうのでは意味がありません。そのため、しっかりと軸を決める、つまり優先順位を決め、それ以外は補足的に使うといった「チャート分析の思想」が求められます。

もう1つ重要なことは、いくつものテクニカル指標やチャート分析の手法を組み合わせるといことは、それぞれに対して信頼を置いていない証拠であり、投資家自身の自信のなさの表れでもあります。

何事も一長一短ですから、良いところ取りをしようとするれば、その副作用は計りしれません。そのため、ここでも軸を決めて、**数少ない手法でもそれを深く身に付けることを目指すべき**なのです。

投資家の心理は相場に相対すると不安定になり、自分の判断が正しいことを証明しようとしします。これは「自分に都合の良い判断をする」ためだけの行動に過ぎません。大切なのは、「**選択と集中**」、そして「**信頼**」です。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



経済のグローバル化と 外国為替相場の密接な関係

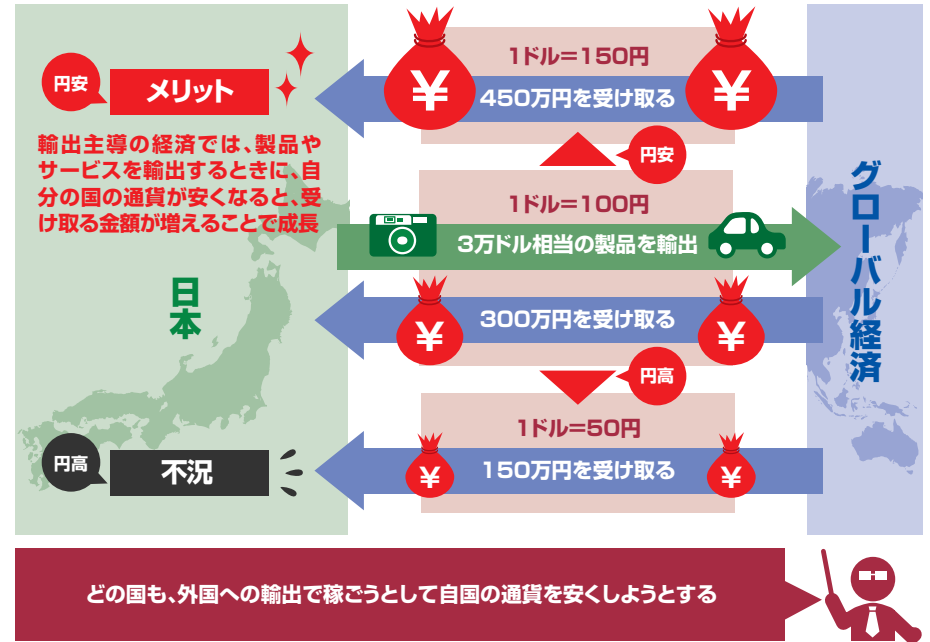
世界の経済はボーダーレスとなり、グローバル化が加速度的に進んでいます。そして、外国為替市場の存在は、ますます重要になっています。輸出で外貨を稼いで経済成長を図っても、資源エネルギーや農産物を自給自足できない国は、為替レートが安くなっても高くなっても問題です。

どこかの国の通貨が売られれば、相手方の通貨が買われるのが外国為替相場。2つの国の状況を比較して、どちらがより強いのか弱いのかを見極めなければなりません。その判断材料として経済と金利の状況があります。

経済のグローバル化が進展すれば、先進国も新興国も輸出をして外国にモノやサービスを売ろうとします。しかし、国内の消費が盛んな国は多くのモノを輸入しますから、それ以上に輸出をして外貨を稼ごうとします。

第4章のコラムで、国を家族に見立てた例を紹介しました。ある家族が貯金を殖やそうとすれば、外からお金を稼いでこなければなりません。逆に、すでに多くの貯金を持っていても、高価な家や自動車、家電製品、宝飾品などを買い漁り、毎日贅沢な外食をしていれば、そのうちお金は底をつきます。つまり、国が大きくなる＝経済が成長するためには、外国にモノやサービスを買ってもらう＝輸出を増やす必要があるわけです。

しかし、**自分の国の通貨の為替レートが上がれば、同じモノやサービスを輸出しても、手取りは減る**ことになります。



たとえば、1ドルが100円の時300万円の自動車をアメリカに売れば、3万ドル=300万円を受け取ります。ところが、1ドルが50円になれば、手取りは150万円にしかありません。逆に1ドルが150円になれば、450万円を受け取ることができますから、50円の円安になった分、150万円は丸儲け。つまり、自分の国の為替レートが安くなれば、企業の利益と国民の収入は増え、経済は好調になります。これが通貨安のメリットです。

これだけなら円安は大歓迎ですが、果たしてそうでしょうか。**エネルギー資源の乏しい日本は急激な円安になると、原材料高になり、何を作るにもコスト高の要因**になりますし、電気代やガソリン代が上がり、出費も増えてしまいます。さらに、資源や小麦などの農産物の価格が上昇すれば、二重の打撃です。輸出で外貨を稼いでも、国内のコストが上がれば、国全体では相殺されてしまい、円安のメリットはなくなります。

為替レートと資源価格、国内物価、そして輸出入の関係は、常に目を光らせておく必要があります。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



通貨安は メリットばかりではない

経済が成熟した先進国は自国内での設備投資や消費だけでは成長が望めず、輸出依存の体質になるため、自国通貨安が欠かせません。反面、新興国が近代化するときには大量消費される資源・エネルギーや食糧の価格が上昇し、通貨安になると輸入物価がさらに上昇する恐れがあります。

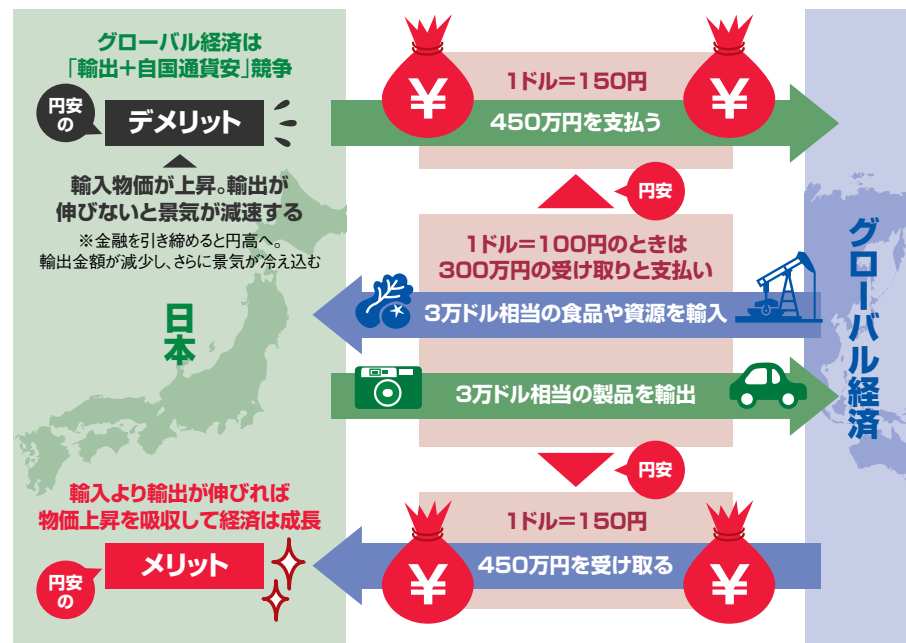
先進国が景気回復の手段として、政策金利を低く抑え、さらに量的緩和も実施することで、自国通貨が安くなるように仕向けているわけですが、これはメリットばかりではありません。

外国との貿易は、輸出か輸入のどちらか一方ということはありません。輸入が多い国の通貨が安くなると、その反動は大きなものになることがあります。

たとえば、多くの国が輸入に頼っている資源です。通貨が安くなれば、外国からモノを買うときにはコストが上がることになります。前項では300万円の自動車を例にして解説しましたが、それと正反対です。つまり、通貨安で資源の輸入価格が上昇し、経済全般のコストも上がります。

▶▶ 景気の足を引っ張る恐れもある自国通貨安

コストが上がり、これまで通りの利益を確保するためには、値上げをする必要があります。物価が上昇するよりも収入が増えれば、消費が落ち込



むことはありませんが、それが逆転すると、景気は減速します。インフレが起きれば景気は過熱し、金融をいっそう引き締めなくてはならなくなり、政府や中央銀行の経済に対する舵取りは難しくなります。このように、通貨安にはメリットとデメリットがあります。

リーマン・ショック以降は、先進各国の景気を移す鏡として失業率や雇用者数の統計が注目されてきました。ところが最近、特に日本では**輸出と輸入の差がどれだけあるかをみる貿易収支が再び注目**されはじめています。しかし、これは目新しいものではなく、日本がバブル経済に躍っていた時期に何かと取り上げられた経済指標です。**その時々の世界の経済状況によって、注目されるテーマが異なる**ということは覚えておいてください。

話を戻すと、自分の国のモノばかり売っている = 輸出が輸入を大幅に上回っていると、相手国からもっと買ってくれと非難されます。しかも、景気が良いなら通貨は高くなるはずなのに、それを意図的に抑えていることも非難の的になります。難しそうな経済の話も、結構、俗っぽいものです。

